

内容

センター活動報告	1
シャリテ医科大学と千葉大学のシンポジウムに参加	1
同窓会イベント「会員による会員の招待」を開催	1
第 7 回 JUNIOR FORUM を開催	2
JANET フォーラム 2019 に参加	2
AVH NETWORK MEETING に参加	3
第 5 回日 EU 科学技術協力合同委員会に出席	3
第 16 回日独学術コロキウムを開催	3
在ミュンヘン大学関連機関と面会および在ミュンヘン 総領事レセプションに参加	4
センター長コラム	5
ドイツ学術ニュース	6
センターからのお知らせ	17

【表紙写真: Hamburg、市庁舎広場のヴァイナハツマルクト Weihnachtsmarkt】

ドイツでは 11 月下旬ころから、国内及び近隣国地域の各都市が、クリスマス・マーケット(ヴァイナハツマルクト Weihnachtsmarkt)を開催します。ドイツ第 2 の規模を誇る Hamburg では、煌びやかなマルクトが市庁舎広場のみならず、街中のあちこちの広場で開かれていました。地域によってもマルクトの呼称が異なる他、街によって雰囲気ながらりと変わるので、様々な都市を巡って各地のマルクトを見て回るのもとても楽しい旅行プランになります。

センター活動報告

シャリテ医科大学と千葉大学のシンポジウムに参加

日程：2019 年 10 月 23 日（水）

場所：在ドイツ日本国大使館（ベルリン）

参加者：林センター長、Hoffmann 現地職員、宇美国際協力員

シャリテベルリン医科大学と千葉大学の密接な国際協力関係をもとに、ベルリンにある在ドイツ日本国大使館にてシンポジウムが開催され、当センターからは林センター長、Hoffmann 現地職員、宇美国際協力員が参加しました。シャリテベルリン医科大学と千葉大学は 2010 年から協働しており、今回のシンポジウムでは「シャリテと日本のつながり ―森鷗外を出発点として―

と題されたテーマのもと、日独の連携の歴史を振り返りつつ、医学分野での日独の今後の連携について様々な観点からの講演がありました。始めにドイツ連邦共和国駐箚特命全権大使の八木毅氏、千葉大学理事の中谷晴昭教授より開会の挨拶が述べられました。その後 5 名の講演者がそれぞれの研究活動や両機関の協力体制について発表しました。そのうちの、千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教授の森千里氏はシンポジウムタイトルにもなっている森鷗外の曾孫にあたる方で、森鷗外の時代の日独の医学研究の交流から現在に至る長年にわたる両国間の交流・研究協力の歴史について話されました。シンポジウムの後にはレセプションが催され、本センターは会場にブースを設け、JSPS の事業、主にフェローシップ事業についてプロモーションを行いました。

同窓会イベント「会員による会員の招待」を開催

日時：2019 年 11 月 1 日（金）～2 日（土）

場所：リューベック大学（Universität zu Lübeck）

JSPS ボン研究連絡センターは、毎年、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）主催イベント「会員による会員の招待」（MIMe: Mitglieder laden Mitglieder ein）の開催を支援しています。本イベントは、JSPS Club 会員が他の会員を招待し、ネットワーク形成を促進することを目的に開催されているものです。第 14 回目となる本年は、リューベックにおいて学術講演等が行われました。

1 日目は、リューベック大学のライシュック（Rüdiger Reischuk）教授、タウツ（Norbert Tautz）教授、JSPS Club のメンクハウス（Heinrich Menkhous）会長の挨拶により始まりました。その後、3 名の講演者がそれぞれの研究活動について発表を行いました。続いて、フラウンホーファー海洋バイオテクノロジー研究所のガイドツアーが行われ、参加者は充実した研究設備を見学することができました。

2 日目は、リューベック旧市街のシティーツアーやヨーロッパハンザ博物館（Europäisches Hansemuseum）の見学が行われ、参

加者はハンザ都市リューベックの歴史について理解を深めることができました。その後の昼食会では、会員同士による活発な交流がさらに進みました。



▲集合写真



▲当日の様子

第 7 回 Junior Forum を開催

日時：2019 年 11 月 2 日（土）

場所：Seminarraum des Europäischen Hansemuseums
（リューベック）

JSPS ボン研究連絡センターは、2019 年 11 月 2 日（土）、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）との共催で、今回で第 7 回目となる Junior Forum をリューベックで開催しました。本イベントでは、外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員）により日本に研究滞在後、今年度中にドイツへ帰国した研究者を招待しており、今回は 11 名の若手研究者が参加しました。帰国直後の若手研究者が日本での研究滞在経験を発表するとともに、JSPS Club 会員であるシニア研究者がキャリア形成について体験談を紹介することで、研究者同士の意見交換の機会を提供すること、また若手研究者の同窓会加入を促進することを目的としています。

始めに、林センター長、JSPS Club のメンクハウス（Heinrich Menkhau）会長からの挨拶がありました。続いて、今年度のサマー・プログラム、外国人特別研究員（欧米短期）、あるいは外国人特別研究員（一般）に参加した若手研究者から、日本での研究滞在についてそれぞれ報告がありました。次に、JSPS Club 会員のシニア研究者（Katja Kölkebeck 氏、Rüdiger Reischuk 氏の 2 名）から、それぞれ自身のキャリア形成についての体験談が紹介されました。その後、コーヒースタンドを挟み、若手研究者による発表が引き続き行われました。続いて、JSPS Club の Matthias Hofmann 氏による活動紹介、宇

美国際協力員による JSPS の外国人研究者招へい事業の紹介があり、全体の発表について質疑応答が行われました。最後に、林センター長の挨拶により、閉会しました。

本イベントでは、5 月開催のサマー・プログラムオリエンテーション 2019 で既に顔を合わせていた若手研究者もあり、日本での経験談に話が弾んでいた様子でした。コーヒースタンドや夕食会の際にも、若手研究者とシニア研究者が混ざって熱心に交流が行われていました。日本での研究滞在という共通の経験を持った研究者同士が知り合い、研究活動や今後のキャリア形成について意見交換する良い機会となりました。



▲集合写真



▲当日の様子

JANET フォーラム 2019 に参加

日時：2019 年 11 月 4 日（月）～5 日（火）

場所：University College London、在英国日本国大使館
（ロンドン）

参加者：林センター長、青山副センター長

JANET フォーラム 2019 が 11 月 4 日（月）～5 日（火）に大阪大学と University College London が中心となり、イギリス・ロンドンにて開催されました。

JANET（Japan Academic Network in Europe：在欧日本学術拠点ネットワーク）は、主に欧州に拠点を持つ日本の大学・学術関連機関による日欧の学術情報交換を目的とした組織

です。4 回目となる本フォーラムには、日欧の多くの関係者が参加しました。

フォーラム初日には、Prof. Katharine Carruthers, University College London, Pro-Vice-Provost、西尾章治郎大阪大学総長の挨拶に続いて、高等教育についてのセッションや同窓会ネットワークに関するワークショップが開かれました。また、翌日のフォーラムでは、研究/高等教育に関する戦略や資金獲得に関

する戦略にまつわるセッションや超高齢社会に関するシンポジウムが開かれ、活発な議論がなされました。

来年 2020 年の JANET フォーラムは 11 月にドイツ・ベルリンにおいて、千葉大学が企画機関となり、同大学がオフィスを構えるシャリテ医科大学及び在ドイツ日本国大使館を会場として開催される予定です。

AvH Network Meeting に参加

日程：2019 年 11 月 6 日（水）

場所：ハンブルク大学（Universität Hamburg）

参加者：宇美国際協力員

11 月 6～8 日、フンボルト財団（AvH）が支援する奨学生のためのネットワークミーティングがハンブルク大学で開催されました。AvH は本会のドイツにおける対応機関の 1 つであり、研究者の学術交流を支援する機関です。当該イベントは、同財団の支援を受け活躍する研究者のネットワーク構築を目的に毎年開催されており、今回は世界 50 カ国から 245 名の奨学生が集まりました。11 月 6 日には、ハンブルク大学学長による挨拶および同大学の紹介、AvH 事務局次長による同財団の概要と

活動紹介の後、ハンブルク大学の美術史学の教授であり、2013 年のフンボルト教授である Frank Fehrenbach 氏から“Leonardo da Vinci’s Natural Theory of Images”と題した基調講演が行われました。講演後は、奨学生の出身地域ごとに 8 つのグループに分かれディスカッションの時間が設けられ、宇美国際協力員はインド・日本・韓国・パキスタン・フィリピン・ウズベキスタン人奨学生のグループに参加しました。グループディスカッションでは、奨学期間中の彼らの研究活動、経験したトラブル、今後の展望などについて活発な議論があり、奨学生が AvH アジア担当と直接顔を合わせる機会となっていました。グループディスカッションの後は盛大な夕食会が催され、世界中から集まった奨学生たちが互いの研究テーマを語り合いながら歓談していました。

第 5 回日 EU 科学技術協力合同委員会 に出席

日時：2019 年 12 月 2 日（月）

場所：EU 研究総局本部 ORBAN 庁舎（ブリュッセル）

参加者：林センター長

第 5 回日 EU 科学技術協力合同委員会がブリュッセルで行われ、日本学術振興会（JSPS）からは林ボン研究連絡セ

ンター長が出席しました。EU 側からは Horizon Europe について、また日本側からはムーンショット型研究開発制度についての説明が中心となりました。Horizon Europe は、Horizon 2020 の後継政策として 2021 年から始まる 7 年間のプログラムであり、予算総額は 10 兆円規模です。林センター長からは、JSPS が我が国の学術振興を担う資金配分機関として、研究者の自由な発想に基づく人文学、社会科学から自然科学までの幅広い分野の学術研究の振興を行っていることなど、本会の概要について述べるとともに、外国人研究者招へい事業をはじめとする様々な国際事業、JSPS 事業経験者による研究者コミュニティ支援等について説明しました。

第 16 回日独学術コロキウムを開催

日時：2019 年 12 月 9 日（月）～10 日（火）

場所：ハンブルク工科大学（Technische Universität Hamburg）

本センターは、2019 年 12 月 9 日～10 日にかけて、ハンブルク工科大学、神戸大学との共催により、第 16 回日独学術コロキウムを開催しました。本コロキウムは、先端的科学分野のテーマを選定し、若手研究者を含む日独双方の専門家による研究発表と討論を行う小研究会です。第 16 回目となる今回は「Process Engineering」をテーマに、日独の研究者約 20 名が参加しました。日本からは、神戸大学の富山明男教授、喜多

隆教授、水畑穰教授、大阪大学の杉山和靖教授、館林潤准教授、鳥取大学の薄井洋行准教授が講演者として参加しました。

9日のオープニングでは、日独双方のオーガナイザーであるハンブルク工科大学の Michael Schlüter 教授、神戸大学の富山明男教授から挨拶があり、引き続き、ハンブルク工科大学の Andreas Timm-Giel 副学長、在ハンブルク日本国総領事館の加藤喜久子総領事より日独研究者交流に対する本コロキウムへの期待が述べられました。その後は、日独双方の研究者がそれぞれの研究内容を発表し、議論を行う形で進行了。研究発表は4つのセッションに分けられ、各日2つのセッションが行われました。各セッションでは、各発表者から専門的な内容の研究発表がなされ、それに続いて質疑応答が行われました。昼食後は、Scientific TUHH campus tour としてハンブルク工科大学内の施設見学が行われ、参加者たちは興味深い様子で見入っていました。

午後のセッションでは、渡邊国際協力員による JSPS の国際交流事業のプレゼンテーションが行われた後、両大学間の今後の学生交流に関する協議が行われました。10日は、前日に引き続き、日独双方の研究者による発表と議論が行われました。昼食休憩を挟んで、2つのセッションを終えた後、全体のまとめとして日独双方のオーガナイザーおよび林正彦センター長から、本コロキウムに対する講評および感謝の言葉が述べられました。終了後、日本側参加者の交流夕食会が行われました。日本側参加者からは、ドイツ側だけでなく日本側の研究者とも知り合える貴重なネットワーキングの機会となったとのフィードバックを得ることができました。



▲左から、林センター長、加藤在ハンブルク日本総領事、Timm-Giel TUHH 副学長、Schlüter 教授、富山教授



▲集合写真



▲当日の様子

在ミュンヘン大学関連機関と面会および 在ミュンヘン総領事レセプションに参加

日時：2019年12月19日（木）～20日（金）
場所：バイエルン州科学芸術省、ミュンヘン大学、ミュンヘン工科大学、在ミュンヘン日本国総領事公邸（ミュンヘン）
参加者：青山副センター長

在ミュンヘン日本国総領事館のお声掛けにより、12月19日（木）～20日（金）にミュンヘンにて標記イベントが開催されました。各大学およびに省に赴いての面会では、まず、青山副セ

ンター長から JSPS やボンセンター、JSPS 国際交流事業についてのプレゼンテーションを行いました。



▲当日の様子

引き続き、各大学および省担当者から各団体の紹介とともに国際交流の現状の説明があり、その後、具体的な JSPS を活用した日独研究交流の深化について議論を行いました。
また、ミュンヘン総領事公邸に招いていただいたのレセプションでは、ミュンヘン大学、ミュンヘン工科大学の国際交流事業担当

者および JSPS 同窓生が集まり、木村在ミュンヘン日本国総領事、Prof. Dr. Geerd Diercksen とともに挨拶を行いました。
同窓生との交流に加え、国際交流事業担当者との情報交換も行うことができ、非常に有意義なイベントとなりました。

センター長コラム

ドイツでも時速 300 km で走れる電車がたくさん運行されている。

ただ、ほとんどの路線で在来線を使うため、時速 300 km で走れる区間は限られているようだ。そういうわけで、東京－名古屋間くらいの距離でも飛行機で移動する人が多い。

私はとりたてて鉄道ファンではないが、このところ電車を利用して長距離を移動することが多くなった。「飛び恥」(Flygskam)を気にかけているわけではない。多少時間がかかっても、その方が快適なのだ。

特急に相当する ICE (Intercity Express) は座席が広く、長く座っていても疲れない。無料 WIFI もあるし、隣り合う座席の肘掛け下にはコンセントもある。普通は食堂車も連結されているし、車内販売もある。概ね 6 時間以内で行けるなら、電車で行った方が楽だ。

そんなわけで頻繁に電車を利用するようになった。すると日本ではまず経験しないようなできごとに遭遇する。

とある人口 10 万程度の街の研究所に打合せに行ったときのこと、初めて乗ったドイツの気動車は新しく清潔で、乗客もまばらだった。始発駅を出ると車掌さんが検札を済ませて行ったが、しばらくすると戻ってきて、ふたつめの駅で降りるように言われた。その駅では、なんと後続の同じような編成で同じデザインの列車と、乗客、車掌、運転士すべてを入れ替えたのだった。何のためにこんなことをやるのだろうと不思議でしかたなかったが、残念ながら私のドイツ語力では車内アナウンスがよく聞き取れず、分からずじまいであった。

その帰りのこと、打合せも終わってあとはボンに帰るだけ。暖房の効いた駅のショッピングコーナーには軽食用の机と椅子もある。その向かい側では飲み物を売っていて、近づくともビールを山ほど発見。瓶をひとつ持ってレジに行き、お金を払って栓を抜いてもらおうと、レジのお姉さんが「ここはアルコールフリー区域なので、外へ出て飲んでね。」とのこと。そんな...

寒いなかビールを飲んで、2 両編成のローカル列車に乗り込んだ。しばらくすると前方が騒がしい。みんなで歌を歌っているようだ。お酒も入っているのだろう。ごきげんな人たちである。列車のなかでお酒が飲めるのは日本と共通だ。でも、みんなで大声で歌っている場面は、最近の日本では見たことがない。日本では自制が働いて、みんなそんなことはできないだろう。

さっきのビールが効いてきて気分も良くなり、そのまま暖かいローカル列車に揺られて帰ってきた。



【写真】ICE の天井に取り付けられたモニターが示す速度

ドイツ学術ニュース

コミュニケーション賞 2020：傑出したサイエンス・コミュニケーションの評価における新たな重点

新しい賞のスタート／さらに考慮されるべき科学と社会の間の対話に対する要望の変化／50,000 ユーロの賞金

コミュニケーション賞 20 周年記念のため、ドイツ学術振興協会（die Deutsche Forschungsgemeinschaft：DFG）とドイツ学術財団連盟は傑出したサイエンス・コミュニケーションの評価において、新しい重点を置きたいと考えている。この二つの組織によって授与されるこの賞は、将来的に、基本的枠組みと科学と社会との対話に対する要求事項を取り上げ、それらを反映することを目的としている。DFG は、正式名称『コミュニケーター賞ードイツ学術財団連盟の科学賞』を再び公募していて、公募期間は 2020 年 1 月までである。

1999 年に開始され、その翌年初めて授与されたコミュニケーター賞は、ドイツのサイエンス・コミュニケーションの分野で最も重要な栄誉と見なされている。これは、特に革新的で多様かつ効果的な方法で、科学研究とその主分野を広く一般の人々が利用できるようにし、そうすることによって科学と社会の間の対話へコミットするように取り組んだことに対し、すべての専門分野の研究者に授与される。賞金は 50,000 ユーロだ。

この賞の初期段階では、科学的な話題や調査結果を広く一般に伝えることが、受賞者を選定する際の主な焦点だった。しかし一方で、科学者たちは次第に、彼らの働き方について見識を示すことや、彼らのターゲットグループとの対話を模索することを求められるようになっていく。彼らはまた、彼らの研究の社会的な側面を認識すること、彼らの知識を公開討論の場や、意思決定プロセス及びその決定そのものにも貢献させることも求めら

れている。将来的に、このコミットメントは受賞者の評価と選定においてより重要なものとなるだろう。また、この賞は特に創造的で挑戦的なサイエンス・コミュニケーションのアプローチにも与えられるだろう。賞金は受賞者のコミットメントを支援するとともに、新しいプロジェクトの実施を促進することを目的としている。

この賞は個人の研究者、もしくは小さな研究グループに与えられる。自己申請と推薦の両方が可能だ。賞への応募はドイツの大学や研究機関で働いている科学者たちに対して開かれている。申請手続きと賞に関する詳しい情報は、DFG の Web サイトで確認できる（詳しくは下記より）。

申請書、推薦書は遅くとも 2020 年 1 月 3 日（金）までに要提出。DFG 実行委員会のメンバーを議長として、サイエンス・コミュニケーションの専門家及び科学ジャーナリストの審査委員が、賞の授与を決定する。受賞者の選定と通知は 2020 年の春に行われる。授賞式は 2020 年 6 月 30 日（火）に、ベルリンでの DFG 年次総会の一環として開催される。

コミュニケーター賞、応募および選考プロセス、以前の受賞者に関する情報：Communicator-Preis

https://www.dfg.de/gefoerderte_projekte/wissenschaftliche_preise/communicator-preis/index.jsp

2019 年 10 月 2 日

DFG：Communicator-Preis 2020: Neue Akzente bei Würdigung herausragender Wissenschaftskommunikation

https://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2019/pressemitteilung_nr_49/index.html

人工知能： DFG が戦略的ファンディング事業を決定

事業全体で約 9,000 万ユーロ／最大八つの研究グループと 30 の若手研究グループへの公募とファンディング

ドイツ研究財団（die Deutsche Forschungsgemeinschaft：DFG）は、人工知能（AI）の分

野での戦略的ファンディング事業を承認した。今後数年間で、AI 研究に関するすべての分野からのプロジェクトは、さまざまなファンディング・プログラムによって資金提供される。この目的のために、合計約 9,000 万ユーロの資金が割り当てられている。

今この事業実施を決定することで、ドイツ最大の研究資金提供機関、及び科学の中央自治組織は、AI 技術が研究及び科学の多くの部門で知識プロセスにとって不可欠なものになりつつ

あるという事実注意到意を払っている。この事業は様々な活動分野に対応している。

一方で、AI の分野の方法論的研究と、AI 技術がますます活用されている分野の基礎研究とを密接に結び付けつつ、この分野のトップクラスの学術研究の必要性を強調している。影響を受け合うそれぞれの研究分野の密接な相互作用において、AI 研究の文脈での重要かつ基本的な、哲学的、法的及び社会的科学研究の疑問点の調査も非常に重要である。最終的に、この分野のトップクラスの研究者間での競争に勝つことは、国際競争における研究システムの位置付けに重要な役割を持つ。

この事業の焦点の一つは、DFG のエミー・ネータープログラムにおける若手研究グループの公募とファンディングである。これにより、AI 技術研究を主題とする次世代の優秀な科学者たちが、高度な自律性を備えたキャリア選択を早期に開始することによって育成されていくだろう。この事業の一環として、連続した3年間の公募により、最大30の若手研究グループを設立することができる。

AI 技術の分野の研究者と他の研究分野の研究者との協力を促進するため、最大八つの研究グループの公募とファンディング

が計画されている。各研究グループの目的は、トピックと人材の観点から、それぞれの機関の研究の焦点と AI 方法論分野の研究を組み合わせることである。ここでの焦点は、科学的知識を獲得する目的で AI 技術を活用する研究分野と、AI の使用に関連する包括的、実践科学的且つ理論科学的、認識論的、法学的あるいは社会学的な問題を調査する研究分野である。AI 技術開発と、それぞれの研究分野との間のインターフェイスにおける教授職の設置と統合に特に注意が払われている。

戦略的ファンディング事業の公募は、2019 年中に公開される予定であり、最初のファンディングの決定は 2020 年に行われる。

2019 年 10 月 7 日

DFG : Künstliche Intelligenz: DFG beschließt strategische Förderinitiative

https://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2019/pressemitteilung_nr_50/

もっと多くの学生のためにもっと BAföG を： 全国案内ツアーが新しいファンディング機会について通知

連邦奨学金法（Bundesausbildungsförderungsgesetz : BaföG）約 50 年にわたって成功しているが、さらに良くなるだろう。BAföG は 2019 年 8 月 1 日に改革された。新しい最大の月額助成額レートは現在 853 ユーロ（以前は 735 ユーロ）である。2020 年には 861 ユーロに再値上げの予定。同時に、収入手当が増額され、より多くの学生のための財政支援が可能となる。連邦教育研究省（Bundesministerium für Bildung und Forschung : BMBF）が運営している全国案内ツアーが、キールとロストックからドレスデン、ドルトムントを経由してミュンヘンまでの 28 の大学及び専門大学で、11 月初旬まで BAföG 改革に関する情報提供を行い、ファンディングの機会について説明する。

連邦教育研究省の Anja Karliczek 大臣は次のように説明する。「ドイツはチャンスの国である。教育へのアクセスは、私たちの社会の最優先事項である。私たちは、両親の財政状況に関係なく、誰もが可能な限り最高の道を追求できるようになってほしいと考えている。BAföG は、ほぼ 50 年に亘って平等な機会を提供してきた。できるだけ多くの若者にこの機会を活用してほしい。BAföG 案内ツアー2019 で、私たちはこれに貢献したいと思っている。『あなたの将来を提案してください！』のモットーの下、BAföG の機会を若者に知ってもらいたいと思っている。」

2019 年 10 月 14 日

BMBF : Mehr BAföG für mehr Studierende

<https://www.bmbf.de/de/mehr-bafoeg-fuer-mehr-studierende-9891.htm>



国際的な学習カリキュラムにはカリスマ性がある

ジョイント・ディグリーかダブル・ディグリーか：提携大学とのダブル・ディグリーが可能な学位コースを備えている大学は、ただ国際的であるだけではない。コース履修者は研究と教育の集中的な交流の恩恵を受けるとともに、修了生はすばらしい雇用機会の見通しを得ている。ミュンスター応用科学大学、ブランデンブルク工科大学コットブス・センクテンベルク、フィリップス大学マールブルクの成功事例を見てみよう。

高等教育機関の使命は、国境を越えて知識を得る基盤を提供し、知識を深め、伝達することである。教師と学生国際的なコミュニケーションに参画できなくてはいけない。これにはダブル・ディグリーが組み込まれた国際的な学位コースが必須である。それらは、ドイツの大学の国際化と学生の流動性に的を絞っている。それらの学位コースのうち 108 のプロジェクトは、目下ドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst：DAAD）のファンディング・リストに載っている。20 年以上に亘り、DAAD は「ダブル・ディグリーを有する統合国際学位コース」というプログラムで、そのような学位コースの設立を支援してきた。連携の形式に応じて、修了生は複数の大学が単一の学位を承認するジョイント・ディグリーか、二つの提携大学でそれぞれ学位が認定されるダブル・ディグリーを取得する。

ラテン・アメリカの 11 の提携大学

大学がパートナーを自由に選べることは、ミュンスター応用科学大学のドイツ・ラテン・アメリカ経営学学位コース“CALA”に例示されている。これは Carrera Alemana-Latinoamericana de Administración の略称である。ミュンスター応用科学大学は、一つの提携先だけでなく、大陸全体と協力関係にある。この、いわゆるマルチ・パートナーシップにおいて、学生はアルゼンチン、ブラジル、チリ、コスタリカ、コロンビア、メキシコ、ペルーの大学で 1 年半を過ごす。学業を無事修了すると、彼らはミュンスター応用科学大学とラテン・アメリカの提携大学のそれぞれの学位を取得する。

CALA が CALI を導き出す

このパートナーシップは、2003 年に退職した経営経済学者の Klaus Rother のラテン・アメリカ人の知人との付き合いから始まった。彼と共に、2001 年に設立されたミュンスター応用科学大学経済学部国際研究室の Martina Ratermann 室長は、統合国際研究プログラムの組織の設立を支援した。同時に、彼

女は卒業生ネットワークを構築した。このネットワークには、CALA の卒業生だけではなく、コースをサポートし、実践的なセミナーの仲介者ともなり得る企業も含まれている。「このプログラムは広がっています。」と、ミュンスター応用科学大学の教育・国際問題担当副学長の Frank Dellmann 教授は述べている。数か月前、ミュンスター応用科学大学は、CALA の経験を工学科学分野に移行するために、「CALI」という名称で 2 番目のプログラムを申請したところだ。

大学は国際的なプロフィールを明確に

ある発展を Tabea Kaiser 氏が確認している。彼女は DAAD で教育部門の国際化部門責任者を務めている。「ダブル・ディグリープロジェクトは、大学が国際的な地位を確立するための重要な構成要素である。それに、各種学位プログラムはそれぞれの大学の国際的な要素を更に発展させるため、大学が行う努力は非常に価値がある。」

優れたコミットメントが成功事例を保証

いわゆるダブル・ディグリー、すなわちそれぞれの提携大学から授与される学位は、「一貫した国際的流動性の理想的な方法である」と、Kaiser 氏は言う。なぜなら、それは留学課程を簡素化し、学位プログラムを際立たせる有用性な例示となる。海外滞在は概念的に大学での勉学に組み込まれ、独立して運営されておらず、学業に関連付けられる必要がある。例えば、異文化間で発揮される能力に加えて、学生がさらなる専門的知識を獲得し、様々な労働市場にアクセスできるようになるため、国際性は強みを持つ。また、教師は人脈を広げ、共同学習プログラムを活用して教育と研究の更なる協力を図る。

Kaiser 氏は、参加大学とその代表者に称賛の言葉を送る。「大学の体制の調整が難しい場合など、どれだけの個人のコミットメントが背景にあり、いかに解決策が見いだされるか、といったことは称賛に値する。」さらに、個別指導と語学コースにより、学生は海外で過ごすのが簡単になる。これはすべて、「ダブル・ディグリープログラムが成功事例であるということを保証している。

コットブスからメルボルンへ

ブランデンブルク工科大学コットブス・ゼンフテンベルク（BTU コットブス・ゼンフテンベルク）は、メルボルンのオーストラリア・デューキン大学と協力して、ユネスコ世界遺産条約に関するダブル・ディグリー修士プログラムを設立した。学生は 4 学期で、文化、建築、都市計画、環境、ビジネス、観光の観点から、世界遺産のコンセプトの定着と実装に関する知識を習得する。

このプログラムには、客員講師の講義、学習旅行、ドイツ国内及び海外の提携大学とのプログラムが含まれている。コトブスでの勉学は人類の遺産を扱っており、世界遺産とグローバリゼーションの変容プロセスとの関係性を調査している。学位論文は、プログラムの主要分野の一つに焦点をあてる必要がある。コトブスは学位プログラムのドイツでの拠点として好まれている。ベルリンとその周辺城郭、オーバーラウジッツのバートムスカウにあるプリンスプッカー公園は南東に 40 キロメートル、ドイツとポーランドの国境の両側に広がる。または、ユネスコ生物圏保護区であるコトブス、ドレスデン、ゲルリッツにまたがるオーバーラウジッツの池の風景も素晴らしい。

学位コースラッシュ

ダブル・ディグリープログラムは、既存の世界遺産研究の修士プログラムの優れた別のバージョンとして設計され、2013 年以来 DAAD によって継続的に資金措置されている。

Marie-Theres Albert 名誉教授とともに「世界遺産研究」プログラムを開始した Michael Schmidt 教授は、1999 年に、パリのユネスコ世界遺産事務局でプログラムの優位性を高めるための戦略的パートナーシップを見出した。「世界遺産条約をカリキュラム向けに翻訳した。」と Schmidt 教授は言う。

ブランデンブルク工科大学コトブス－ゼンフテンベルクは、とても人気の高い学位プログラムにより際立っている。毎年、世界中から 100 人以上の学生が、通常の学位コース「世界遺産学習」の 40 人の枠に応募している。ダブル・ディグリープログラムには最も優秀な 5 名の学生が選ばれる。

「修士課程の国籍の多様さは、ドイツ国内でもトップである。」と Schmidt 教授は言い、さらに次のように付け加える。「時折、何がより魅力的なのかわからない時がある。学位コースに参加している国々の教育や多様性、そしてその可能性が世界遺産の言説を拡大する。

ここでの利点の一つは、DAAD の資金措置プログラムである。これは、成功したダブル・ディグリー及びジョイント・ディグリーを流動的な資金措置で長期的に財政的に支援できる。プログラムの卒業生は、二つの学位を取得する。ブランデンブルク工科大学コトブス－ゼンフテンベルクの世界遺産研究の修士号と、デューキン大学の文化遺産修士号である。世界遺産の専門家として、彼らは学歴に加えて、ユネスコ、各国の省庁、世界遺産の管理、博物館または民間の文化機関で働いている。

同窓生が更なる専門家の議論を開始

さらに、ブランデンブルク工科大学コトブス－ゼンフテンベルクは卒業生との協力関係を培っている。DAAD の支援により、卒

業生はコトブスに招待され、そのコミットメントと経験について報告する。「そうすることで、学科は絶えず新しい局面を得ている。」と Schmidt 教授は述べる。例えば、同窓生が文化財の破壊、強盗行為、または返還に関して報告し、それによりさらなる議論が行われる場合など。

マールブルクからケントへ

フィリップス大学マールブルクでは、ジョイント・ディグリー、つまり両方の提携大学が承認する単一の学位を取得できるヨーロッパ圏の修士課程を提供している。エラスムスのパートナーシップに基づいたカンタベリー・ケント大学との良好な付き合いのおかげで、両大学は 2011 年に開始するジョイント・コース「平和と紛争研究」を開発した。モジュールは、対立理論、調停、暴力の社会的再検討などのトピックをカバーしている。このプログラムには少なくとも 10 週間のインターンシップが含まれている。

異なる大学システム、補完的な視点

「かなり当初から、ジョイント・ディグリーの構造の点から考えていた。」と、学位プログラムの責任者であるマールブルク紛争研究センターの副マネージングディレクターである Thorsten Bonacker 教授は言う。「学生がある場所で勉学を開始し、別の場所で勉学を修了できるようにする必要がある。」

マールブルク側では、補完的な教育及び研究プロジェクトの機会もある。ケント側で国際政治と安全保障に焦点をあてている一方で、マールブルク側では平和心理学と紛争の変容の側面に焦点をあてている。「このように、学生は技術的に補完的な視点で、異なる二つの大学システムに精通するようになる。」と、Bonacker 教授は言う。

プログラムが意欲の高い学生を惹きつける

両方のシステムをカバーするジョイント・スタディ・プログラムを設立するのは簡単なことではなかった。「特に、行政規制が相互に矛盾していたから」と、Bonacker 教授は述べる。とりわけ、入学規則と試験規則の構造が互いに大きく異なっている。例の一つとして、カンタベリーでは、学生は年間 4,600 ユーロに相当する料金を支払っているが、ドイツではそうではない。幸いなことに、英国の修士課程のプログラムは 1 年続いたため、合計 4 学期の学位コースを容易に設計できた。

様々な提携先の管理体制を互換性のあるものにするのは当初困難だったが、プログラムは今や非常に意欲的な学生を惹きつけている。それらの約半分はドイツ出身であり、他のほとんどはヨーロッパから来ているが、アメリカ、インド、香港からも学生が来

ている。彼らはマールブルク大学で歓迎されており、プログラムからも利益を得ている。学位コースは、ドイツ大学長会議による「高等教育の国際化」監査で重要な役割を果たした。Bonacker氏は次のように付け加えている。「これは国際機関、財団、省庁、連邦議会、亡命者との協力などで、最高のキャリアの見通しを提供する」。

Karliczek 連邦教育研究大臣：科学と社会の交流を強化する

サイエンス・コミュニケーションは研究資金の一角となる

11月14日木曜日に発表された方針書によると、連邦教育研究省（Bundesministerium für Bildung und Forschung：BMBF）はサイエンス・コミュニケーションを強化したいと考えている。Anja Karliczek 大臣がそれについて説明：

「学術と社会の対話を強化することは、私の最も重要な政治目標のひとつである。したがって、サイエンス・コミュニケーションは将来、私の省のファンディング方針においてははるかに重要な地位を与えられるだろう。サイエンス・コミュニケーションは学術活動のごく自然な要素とならなければならない。私たちは既に始まっているサイエンス・コミュニケーションへの文化変容を支援する。

学術は人々を魅了し、彼らの日常生活を改善するものであるため、人々は学術に興味を持つ。私たちは変革の時代にある。どこでも、人々は疑問を持っている。学術は答えを出すことを宿命づけられている。残念なことに公開討論などにおいては、より多くの事実が無視されたり、不謹慎に再解釈されたりしている。それだけに一層重要なのは、学術からもたらされる説明である。

科学者たちは大きな影響力を持つが、私たちの社会の未来に対しても大きな責任がある。この責任の一部は、自分の仕事や研究成果を（社会に）伝えることである。義務付けられた知識。この意味において、1999年のPUSH覚書（学術と人類のための一般的理解）で、学術機関の長たちは、学術的対話を彼らの主要なタスクのひとつとすることを既に述べている。

私たちの方針書の主たる措置は、将来のファンディングの公募の際に、サイエンス・コミュニケーションを考慮することである。私

2019年10月22日

DAAD：Internationale Studiengänge haben Strahlkraft

<https://www2.daad.de/der-daad/daad-aktuell/de/74586-internationale-studiengaenge-haben-strahlkraft>

たちは、科学者たちが彼らの研究プロジェクトの最初期からサイエンス・コミュニケーションについて考慮し、プロジェクトでそのための資金を割り当てることができるように、インセンティブを増すつもりである。

科学者たちは既に、市民と対話するために、実証されたフォーマットを活用できる。可能性の範囲は広く、例えば公開講演、サイエンス・スラム、例えば降雨及び気象観測に関するデータ収集などへの市民の参加に至るまで、様々である。

私たちはまた、サイエンス・コミュニケーションのさらなる発展を支援したいと考えている。“Wissenschaft im Dialog”のファンドにより、影響を把握するためのプラットフォームをセットアップする。また、シンクタンク#FactoryWisskommを設立する。これらはサイエンス・コミュニケーションが学術機関で最優先事項になることを保証することを目的としている。

背景：

方針書は内外の協議プロセスに基づいて作成された。BMBFは2020年のサイエンス・コミュニケーションの更なる発展に関する戦略的議論を継続及び強化し、永続化させる予定である。学術、学術振興、学術ジャーナリズムの幹部レベルの参画と、コミュニティの関与により、自発的なコミットメントと行動のための具体的な推奨事項が策定される。

2019年11月14日

BMBF: Karliczek: Austausch zwischen Wissenschaft und Gesellschaft intensivieren

<https://www.bmbf.de/de/karliczek-austausch-zwischen-wissenschaft-und-gesellschaft-intensivieren-10173.html>



連邦政府の人工知能（AI）1ヵ年戦略

1年前の2018年11月15日、ドイツ連邦政府は人工知能戦略を承認し、総合的且つ政治的手法でAIの更なる開発と応用の枠組みを設定した

Anja Karliczek 連邦教育研究大臣：「私たちの目標は、AIのすべての分野で世界のリーダーになることである。そして、ドイツにおいて、私たちは正しい軌道に乗っている。しかし、もちろんここで油断してはならず、多くの分野でさらに発展する必要がある。例えば、中小企業はAIがもたらす機会をさらに上手につかむ必要がある。AI研究の継続的強化は、ドイツにおいて成功した総合開発のための基盤である。だからこそ、AI研究のための拠点を拡大し、ネットワークを構築するのである。ドイツでは、世界的に最も優秀な頭脳が必要である。このために、私たちはアレクサンダー・フォン・フンボルト財団（Alexander von Humboldt-Stiftung：AvH）と共に、国際的に著名な科学者をドイツに惹きつけるプログラムを立ち上げた。AIは人々に利益をもたらさだろう。そのため、研究成果を実践に迅速に移行することも、AI戦略の目的である。」

Peter Altmaier 連邦経済エネルギー大臣：「AI戦略の1年目に、AIソリューションの経済への移行を大幅に改善するための方針を設定した。全国的に、AIトレーナー制度が中小企業にAIスキルを教授するために立ち上げられた。これにより、企業は独自の革新的な製品とサービスを実装し、競争力を強化し、仕事を確保できるようになる。独立した欧州データインフラストラクチャーに対するイニシアティブにより、将来の最も重要な要素であるデータを安全に利用可能にし、経済に活用したいと考えている。」

イノベーション競争「経済に関連するエコシステムの操縦者としての人工知能」において、連邦経済技術省はAIの実用化を促進することを目的としたプラットフォームプロジェクトを推進している。「SME デジタル」の優先的資金措置の枠組みにおいて、33人の「AIトレーナー」が6月から選択された8つのSME4.0拠点で業務を開始した。これには更なる追加措置があるだろう。計画されている欧州の独立ネットワーク・データインフラストラクチャー「Gaia-X」の設立も、重要な戦略的基盤である。データの独立

性と広範なデータの可能性は、AIの分野におけるデータ駆動型経済の開発を成功させるための重要な要素である。

10月16日にトゥールーズで開催された仏独首脳会議の際に、経済省及び教育研究省の両大臣は、更なるアクションのための「ロードマップ」に署名した。ドイツとスウェーデンのイノベーション・パートナーシップは、欧州のAIエコシステムを促進するために、人工知能のトピックを含むよう拡張された。

Hubertus Heil 連邦労働社会省大臣：「AIは仕事と社会を大きく変えるだろう。私たちの仕事は、技術の進歩が社会の進歩になることを保証することである。そのため、試験空間の範囲内において、企業でのAI使用を促進している。企業と雇用者が具体的且つ協力的な方法で技術変革を形成した場合のみ、新しい技術にとって必要な信頼が育つと考えられる。」

New Quality of Work Initiative (INQA)の傘下での企業の試験空間のための公募は10月から実行されている。2020年の夏から、仕事業界における人間中心主義のAIアプリケーションをテストするための最も革新的なプロジェクトに資金が提供される。ネットワーキングを促進し、企業レベルでの新しいトレーニングの機会を開発及び提供する、新しい連邦州のフューチャーセンターが現在設立中である：包括的なシンクタンク「Zentrum digitale Arbeit」と、5つの地域のフューチャーセンターは、11月25日のライブヒビでの共同キックオフイベントによって開始される。2020年発にオープンするBMASで建設中のAI観測所の主なタスクは、仕事と社会におけるAIの技術開発、普及、技術影響評価の観察である。2020年にはAI戦略が評価され、必要に応じて現在の開発と需要に適用される。

2019年11月15日

BMBF: Ein Jahr Strategie Künstliche Intelligenz der Bundesregierung

<https://www.bmbf.de/de/ein-jahr-strategie-kuenstliche-intelligenz-der-bundesregierung-10194.html>

ドイツ・インド間パートナーシップ：2024年まで継続

現在の2つの協定が、2016年からドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst：DAAD）とイ

ンドの大学助成委員会（University Grants Commission：UGC）が共同で着手している「インドへの新しい道」の一環として、ドイツとインドのパートナーシップの継続と資金措置を保障している。目的は、制度レベルでの両国の大学間の協力を強化することである。

2019 年 11 月 1 日にニューデリーで開催された第 5 回ドイツ・インド政府間協議の一環として、DAAD 副会長 Joybrato Mukherjee 博士と UGC 議長 Dharendra Pal Singh 博士が 2020 年から 2024 年のドイツ・インド間パートナーシップ継続の協定に署名した。この署名は、連邦首相 Angela Merkel と他の閣僚たちと共にインドを訪問した連邦教育研究省大臣 Anja Karliczek 同席のもと行われた。

同じく 11 月 1 日に、連邦教育研究省（Bundesministerium für Bildung und Forschung : BMBF）とインドの人的資源開発省（MHRD）の間でインドとドイツがそれぞれ 4 年間で 350 万ユーロを準備し、DAAD と UGC をドイツとインドのパートナーシップ実施機関とする協定が締結された。BMBF の代表として Karliczek 連邦教育研究大臣と、インド側の代表として MHRD の Ramesh Pokhriyal Nishank 大臣が協定に署名した。

ドイツ・インド間のパートナーシップは、DAAD と UGC によってイニシアティブ「インドへの新しい道」の一部として、2016 年から共同で資金措置、実施されている。このプログラムの目的は、制度レベルでのインドとドイツの大学間の協力を強化することで

ある。大学は、共同研究計画をさらに発展させ、大学院プログラムを近代化し、それらを国際化戦略に加える機会を得る。これまでに、ドイツとインドの大学間で 10 のパートナーシップ（協力関係）が資金措置された。

両方の合意によって、現在、2019 年 12 月のドイツとインドのパートナーシップの更なる公募のために、2020 年から 2024 年の資金措置期間によって基盤が築かれている。公募は、12 月初旬に DAAD のプロジェクト・ファンディングポータルサイトに掲載される予定である。

2019 年 11 月 22 日

DAAD: Deutsch-Indische Partnerschaften: Weiterführung bis 2024

<https://www2.daad.de/der-daad/daad-aktuell/de/75048-deutsch-indische-partnerschaften-weiterfuehrung-bis-2024/>

PISA 2018 : ドイツは OECD 平均を上回る安定

私たちの需要はもっとあるに違いない：将来的に必要なさらなる努力

15 歳のドイツ人は、読解力、数学、科学の分野で経済協力開発機構（Organization for Economic Co-operation and Development : OECD）の平均を上回っている。生徒の学習到達度調査（Programme for International Student Assessment : PISA）2018 では、読解力が 3 回目の主要テスト対象分野（主要分野）だった。パフォーマンスは 2009 年とほぼ同じレベルで、2000 年の最初の結果を大きく上回っている。2000 年と 2009 においても、読解力は主要な分野だった。それほどでないにせよ、数学と自然科学もテストされた（第 2 分野）。どちらの分野でも、短期的にはほとんど変化がない。長期的に見ると、結果はわずかに低下している。成績の悪い生徒、つまり各分野で最低レベルに達していない生徒の割合は、2015 年以来初めて 3 つの分野すべてで再び上昇している。値は約 20% である。時には約 15 パーセントまで低下していた。

2009 年と比較して、PISA 2018 で生徒の読解力の成績が高くなっている。成績の良い生徒の割合は、読解力が 11%、

科学が 10%、数学が 13% であり、OECD の平均を大きく上回っている。

3 つの分野すべてにおいて、ドイツは、オーストラリア、ベルギー、フランス、ノルウェー、スロベニア、スウェーデン、イギリス、アメリカと同じグループに入っている。優れたヨーロッパ諸国は、エストニアと一部フィンランドである。中国、シンガポール、マカオ、香港の 4 つの参加国が、3 つのすべての分野で優れた結果を達成している。

連邦教育研究大臣の Anja Karliczek は次のように説明している。「ドイツには良い学校制度がある。教師たちは素晴らしい仕事をしている。その結果、ドイツもこの PISA 調査で OECD 平均をわずかに上回っている。しかしそれに満足することはできない。他の国は私たちを追い抜いている。平均的であることは私たちの求めるところではない。すべての子供とすべての人が良い

教育を受ける資格があるのである。さらに、ドイツでの繁栄は平凡さではなく、革新、創意工夫、卓越性に基づいている。特に懸念されるのは、15 歳の 5 人に 1 人が小学校レベルのものさえ読めないことである。これは、600 万人を超える機能的非識字者の数が減らないという、驚くべき事態である。これは、誰も置き去りにしないという私たちの目標とは一致しない。

連邦政府と州政府は、それぞれの責任範囲において、教育システムをさらに改善することを共に求められている。連邦政府は幼児期の読解力を促進するためのさまざまなプログラムを開始した。今後もより一貫して追求していく予定である。「Schule macht stark」などのプログラムで、私たちは困難な社会的状況の学校を支援するためのより良いツールを模索している。同時に、「Leistung macht Schule」事業で特に成績の高い生徒を支援していく。」

教育大臣会議の議長およびヘッセの教育大臣、R.Alexander Lorz 教授はこう述べる：「PISA 2018 の結果は、15 歳のドイツ人が国際比較で優れたスキルを持っていることを示している。生徒の異人種混合が顕著であるにもかかわらず、学校は国際比較で良好な結果を達成し続けることができている。これは、2001 年以降の努力が報われたことを示している。ひとつの結果は私に自信を与える：第二世代における移民生徒、つまりここドイツで生まれて教育システムを経験した生徒は、以前の PISA 研究と比較して大幅に改善されている。これは、学校が社会の長期的な統合に重要な貢献をしていることを示している。残念ながら、教育の成功と社会経済的背景との強いつながりが再び確認されている。それに満足することはできない。それが、例えば、社会的に困難な状況にある学校のための連邦政府と州政府の共同イニシアティブ「Schule macht stark」と、優秀な成績を修めた生徒のためのイニシアティブ「Leistung macht Schule」を開始した理由である。

PISA 2018 は読解に焦点を当てている。2019 年のヘッセン KMK 議長国の主要トピックとして、私は教育言語としてのドイツ語を選択した。習得しないと、学校の学習プロセスにうまく参加することはほぼ不可能である。今週、教育言語としてのドイツ語に関する KMK 提言の採用と、共同イニシアティブ「言語と文章による教育」の「BiSS-Transfer」へのさらなる発展により、州と連邦政府はこのタスクを引き受けている。」

最重要結果の概要

読解力部門：

- ドイツは 498 ポイントで、OECD 平均の 487 ポイントを大きく上回っている。OECD スコアのトップグループは、エストニア（523）、カナダ（520）、フィンランド（520）、アイルランド（518）、および韓国（514）である。
- 2000 年の最初の PISA 調査以降、ドイツの能力平均は 14 ポイント増加した。2009 年（497 ポイント）と比較すると、横ばいである。
- 読解力が主要分野であった 2009 年以降、成績の高い生徒の割合は 7.6 から 11.3 パーセントに大幅に増加した。低成績者の割合は、2009 年と比較して 18.5 から 20.7 パーセントにわずかに増加したが、重要なポイントではない。

数学の場合：

- ドイツは 500 ポイントで、OECD 平均の 489 ポイントを大きく上回っている。OECD の上位国は、日本（527）、韓国（526）、エストニア（523）、オランダ（519）、ポーランド（516）である。
- 数学が主要分野であった PISA 2012 と比較して、ドイツのパフォーマンスは 13 ポイント大幅に低下した。
- 2012 年以降、成績優秀者の割合は 17.5 パーセントから 13.3 パーセントに大幅に減少した。低成績者の割合は、2012 年以来 17.7 パーセントから 21.1 パーセントに大幅に増加している。

自然科学の場合：

- ドイツの 503 ポイントは、OECD 平均の 489 ポイントを大幅に上回っている。OECD の上位国は、エストニア（530）、日本（529）、フィンランド（522）、韓国（519）、カナダ（518）である。
- 科学が主要分野であった 2015 年と比較すると、ドイツの業績は安定している。
- 2015 年以降、成績優秀者の割合は 10% で安定しており、低成績者の比率は 17.7 から 19.6% に増加している。

成績の不均衡：

- 読解力の分野では、男子は 2009 年に比べてわずかに向上し、女子はわずかに悪化し、性差は 19 ポイントまで減少した。
- 数学では、男子は 2012 年と女子に比べて 17 ポイント大幅に悪化した。その結果、性差はいくらか低下した。
- 自然科学では、男子は 12 ポイント大幅に悪化した。女子のパフォーマンスは変化せず、初めてわずかにリードしている。
- すべての国と同様に、両親の社会経済的地位とドイツの生徒の PISA 結果との間には依然として明確な関係性がある。この相関は OECD の平均よりも強く、2009 年のレベルを上回っている。
- 2009 年以降、移民の背景を持つ生徒の割合は 26 パーセントから 36 パーセントに増加した。OECD によると、これらの若者の約半数は社会経済的地位が低い。両親が移住してきてドイツで生まれた生徒は、読解力で平均 477 ポイントを獲得した。1 人の親のみが移民した場合については、その子供は 497 ポイントを獲得している。海外で生まれ、両親と一緒にドイツに移住したいわゆる第一世代の若者は 405 ポイントを獲得した。

その他の結果：

- ・読解力戦略の分野では、つまり、対象を絞った有意義な方法でテキストを扱う場合、ドイツの15歳の生徒はOECD諸国のトップにいる。
- ・読書の喜びが目に見えて減った。たとえば、ドイツの生徒の3分の1は読書を時間の無駄だと思っている。OECD全体と比較すると、これはかなり少ない方である。
- ・ドイツの若者の3分の2は自分の生活に満足しており、92%が「時々または常に」幸せであると述べている。
- ・国際比較では、ドイツの学校環境は、競争よりもコラボレーションに向いている。15歳の生徒のうち3分の1のみが他の人と競争していると言い、3分の2は他の人と協力することに焦点を合わせている。
- ・生徒のほぼ4分の3は、教師は明らかに教えることを楽しんでいると述べている。
- ・読解力の自信はドイツでは平均を上回っており、自分のスキルの現実的な評価を反映している。

教育の構想のために

PISAは2000年からOECDによって、読解力、数学、科学の主要分野における15歳の能力を評価するために使用されてき

た。79の国と地域がPISA 2018に参加した。世界中で60万人以上の生徒が参加し、ドイツでは223の学校で5451人が参加した。主要分野として3回目の調査となった読解力に加えて、数学と科学の能力がテストされた。

各PISAサイクルでは、読解力、数学、および科学がテストされ、これらの分野の1つは、より多くのタスクと長いテスト時間を伴う焦点分野として詳細に検査される。1つの分野での長期的な発展では、メインドメインの結果のみがカウントされる。

PISA 2018は2015年に続いて、2回目のドイツにおけるコンピューターでの実施となった。この研究は、国際教育比較研究センター（ZIB）、ミュンヘン工科大学（TUM）、ライプニッツ教育研究教育情報センター（DIPF）、およびキール大学ライプニッツ科学数学教育研究所の共同事業であり、連邦政府と州政府が共同で後援している。

2019年12月3日

BMBF: PISA 2018: Deutschland stabil über OECD-Durchschnitt

<https://www.bmbf.de/de/pisa-2018-deutschland-stabil-ueber-oecd-durchschnitt-10349.html>

ドイツへの滞在を特に魅力的と思う国はどこですか？

フンボルトフェローの出身国のランキングが公開

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団（Alexander von Humboldt-Stiftung：AvH）は、毎年外国人研究者による2,000件のドイツでの研究滞在を支援している。そのネットワークには、140か国以上で29,000人以上の卒業生が含まれている。

新たに発行されたフンボルト・ジオグラフィーは、過去5年間で最も業績を修めたフェローや候補者たちがどの国のどの機関から来たのか、そして同窓生が今どこで研究を行っているのかを示している。

過去5年間のフンボルトフェローのほとんどは、米国（673人）、中国（498人）、インド（231人）、英国（226人）から来ている。

出身大学や機関のランキングでは、過去5年間で70人のフンボルト奨学生を擁する中国科学アカデミーがトップであり、オッ

クスフォード大学（45人）とケンブリッジ大学（41人）が続く。

財団の同窓生のほとんどは現在米国（5,091人）、日本（1,725人）、中国（1,650人）で研究を行っている。

「国際的な研究関係は動いている。財団はその研究フェロシップと賞のほとんどを米国の科学者に授与している。しかし、中国がますます重要になっている。」と、財団の事務局長であるEnno Aufderheide氏はこの知の地理を評価する：「当財団のデータは、ドイツでの研究滞在を完了した後、世界のどの機関がフェローたちにとって特に魅力的であるかを示している。米国はほとんどのフンボルト奨学生たちにとって夢の目的地であり続けている」と、Aufderheide氏は述べている。

評価の全体版、ポートレート、及び詳細情報は、以下のリンクより参照：

www.humboldt-foundation.de/web/humboldt-geographie-des-wissens.html

2019年12月9日

BMBF：私たちは、デジタルで持続可能な未来を可能にする

BMBF アクションプラン「Natürlich.Digital.Nachhaltig」の提示

地球環境変化のための連邦政府の科学諮問委員会

(Wissenschaftlicher Beirat der Bundesregierung Globale Umweltveränderungen : WBGU) の会議「デジタル化され且つ持続可能な未来の形成」は、連邦教育研究省

(Bundesministerium für Bildung und Forschung : BMBF) で本日月曜日に開かれる。イベントの一環として、この会議に関する BMBF のアクションプランである

„Natürlich.Digital.Nachhaltig.“が提示された。教育研究大臣の Thomas Rachel 国務長官は次のように説明する。

「明確なのは、未来がデジタルであることである。それは明確である。私たちは、将来の世代のために生きる価値のある未来を確保したいと思っている。だからこそ、私たちは人生のあらゆる分野で地蔵可能性を考慮しなければならない。また、デジタル化と持続可能性を一貫して組み合わせる必要がある。これは広範な社会的アプローチでのみ達成できる重要なタスクである。これがまさに BMBF アクションプラン「„Natürlich.Digital.Nachhaltig.“」の目的である。私たちは、教育、基礎研究、応用研究の分野で幅広い取り組みを開始し、数多くの新しい事業を開始している。

気候変動は私たちにとって大きな課題である。私たちは種の保存に取り組んでおり、持続可能な都市及び農村開発を可能にしたいと考えている。これらすべての分野で、デジタル化を持続可能性の原動力にできる。その潜在能力を十分に活用すれば、例えば、脱炭素化された資源効率の高い経済、エネルギー転換、社会参加の実施に決定的な貢献をすることができる。教育と研究はこれの鍵である。持続可能に行動するには、知識と能力を要するからだ。

同時に、デジタル化のリスクを特定する必要がある。例えば、彼らの「電気への渴望」は、緊急性のある事項として制限されなければならない。したがって、デジタル化が推進されても気候変動が増えるわけではない。ここでは、アクションプラン

‘Natürlich.Digital.Nachhaltig.’が BMBF のコミットメントに強いシグナルを設定している。

背景

アクションプラン‘Natürlich.Digital.Nachhaltig.’はデジタル化と持続可能性の分野における BMBF の現在、及び計画されている対策の三つの分野について説明している。BMBF は、3 つの包括的な目標を追求する。

1. 持続可能なデジタル・イノベーションの基盤を構築する。すべての年齢と教育レベルの人々の教育を促進することにより、私たちは持続可能な行動のためのスキルと能力を、そして特にデジタル化が進む世界で社会に定着させる。また、新しいデジタル分析手法やデジタル技術のセキュリティに関する基礎研究を推進している。新しい技術と持続可能なデジタル・イノベーションへの信頼は、各個人が自分の成長において保護されていると感じた場合にのみ発展する。
2. デジタル化をより持続可能にする。デジタルおよびデジタル化されたインフラストラクチャー及びアプリケーションのエネルギーとリソースの消費を削減し、開発中にリサイクルを考慮する方法と技術を推進している。
3. 17 のサステナビリティ目標を実現するためのデジタル・イノベーションを作成する。デジタルでサポートされるイノベーションの開発と適用により、気候と環境の保護に貢献する。持続可能な都市と循環経済を促進するためにデジタル化を活用する。私たちは、新しい形態のモビリティとエネルギー供給を可能にし、将来のヘルスケアのためのイノベーションを開発する。

会議「未来の形成：デジタル化され且つ持続可能な」は、地球環境変化のための連邦政府の科学諮問委員会

(WBGU) 及びネットワーク化された社会のための機関、ワイゼンバウム研究所 (WI) によって開かれる。WBGU と WI は BMBF によって資金措置されている。

2019 年 12 月 16 日

より実践志向の高等教育 「Made in Germany」

DAAD は BMBF からの資金措置により、エジプトの新しい応用科学大学の 17 コースの設立に資金を提供している

ナイル川地域でのドイツの成功モデル：新しいエジプトの行政首都にあるドイツ応用科学大学（German International University of Applied Sciences : GIU-AS）は、ドイツの応用科学大学（HAW）のモデルに基づいている。実践志向の学習コースは、卒業生がエジプトの雇用市場に適合できるように設計されている。学習プログラムは工学、経営管理学、コンピューター・サイエンス、デザインのコースから始まる。ドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst : DAAD）は、連邦教育研究省（Bundesministeriums für Bildung und Forschung : BMBF）からの資金措置により、「国を超えた教育」プログラムにおけるこれらの学習コースの設立を支援している。GIU - AS は、応用科学のためのドイツの大学のコンソーシアムによって支援されており、このコンソーシアムはエジプトの学位プログラムの技術的な構想とその導入のモニタリングを請け負っている。

Anja Karliczek 大臣は次のように述べている：「ドイツの応用科学大学はユニークである。彼らは科学と実践を印象的な範囲で組み合わせており、あらゆる点においてビジネス拠点としてのドイツにとって有用である。この成功したモデルにエジプトのパートナー達が示した関心を喜ばしく思う。GIU - AS は、エジプト社会全体に利益をもたらすさらなるアプリケーションと、労働市場向けのバリエーションで、エジプトでのドイツの教育の提案を向上させる。エジプトのドイツの大学への高い評価は、GIU - AS で学ぶ意欲の高い若者を引き付ける見込みがある。ベルリン州立大学の GIU - AS ベルリンは、エジプト側から資金提供を受けており、ドイツとの集中的な二国間交流の象徴的な存在でもある。このように、「ドイツの国際大学」は、ドイツとエジプトの両方で知識交換と交換留学の新たな機会を開いている。彼らは国際協力に大きく貢献している。」

DAAD 会長の Margret Wintermantel 教授は次のように述べる：「国境を越えた教育の提供への関与は、国際化と高等教育の世界的な高等教育「Made in Germany」の位置付

けに対する強い推進力とともに、ドイツの大学のプロファイル要素に発展した。したがって、GIU - AS は、高等教育におけるドイツとエジプトの良好且つ緊密な協力の優れた拡張であり、世界中の将来の GIU - AS のテンプレートとして理想的に機能するだろう。」

ドイツ国際応用科学大学（GIU-AS）

GIU-AS を設立するイニシアティブは、2001 年に既にドイツ大学カイロ（GUC）の立ち上げに成功していた Ashraf Mansour 教授から、2018 年に開始された。ドイツの GIU-AS は、HTW ベルリン、HWR ベルリン、ウルム・ハイルブロン大学、及び UAS 7 で構成されるドイツの大学コンソーシアムによって支援されている。エジプトのパートナーは GCU であり、建物、教室、研究室、IT 及びサービスの提供により、プロジェクトを支援している。2019 年 2 月に、新しいエジプトの行政首都にある GIU-AS ビルの起工式が行われ、2020 年の夏学期に定期的な現地調査が開始される予定である。

世界的なドイツ語コースの推進

2001 年以来、DAAD は「国を超えた教育」（TNB）プログラムで、海外のドイツ語コースに資金を提供している。ドイツの大学は現在、アフリカ、アジア、東ヨーロッパ、ラテン・アメリカの 35 개국で多国籍教育プログラムに参加している。現在、初期段階で DAAD の資金を受けた、または現在受けている約 80 のプロジェクトで、合計 276 のコースが提供されている、このプロジェクトは、国際教育市場におけるドイツの大学の認知度に大きく貢献している。ドイツの TNB コースには、世界中で合計 32,000 人以上の学生が在籍している。

2019 年 12 月 19 日

BMBF: Mehr praxisorientierte Hochschulbildung ‚Made in Germany‘

<https://www.bmbf.de/de/mehr-praxisorientierte-hochschulbildung-made-in-germany-10520.html>

ドイツでクリスマスといえば、11月下旬ころから

各地で開かれるヴァイナハツマルクト Weihnachtsmarkt です。

ボンでも、11月23日から中央駅近くのミュンスター広場でマルクトが開かれました。普段は広々とした場所ですが、一度マルクトが立つと広場いっぱいになり、観覧車やメリーゴーランド、からくり人形のしかけなどがあちこちに現れ、広場のシンボルであるベートーヴェン像もモダンにライトアップされました。たくさんの方が毎夜集まってグリューワインやビールを飲んだり、ショッピングを楽しんだり、10月頃からの日照の減少でどんよりとしがちだった雰囲気が払われていくような陽気でした。

また、いろいろな方にマルクトの話を知ると、近隣の街ジークブルクのマルクトのことがよく話題にのぼりました。こちらは屋台の人々が皆中世の時代の装束を纏って伝統料理や工芸品を売っている、まるでタイムスリップしたような気持ちになるユニークなマルクトでした。

宇美 国際協力員



▲ボン ミュンスター広場のマルクト



▲ジークブルクのマルクト

センターからのお知らせ

日本人研究者ネットワーク（JR-Net）のご紹介

本センターHPでは、ドイツ語圏で自主的に立ち上げ運用されている日本人研究者ネットワークを紹介しています。詳細はこちらをご参照ください。

<https://www.jsps-bonn.de/ja/to-all-japanese-researchers/japanese-researchers-network/>



日本学術振興会ボン研究連絡センター
JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, 53175 Bonn（事務所住所）

Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn（郵便物用）

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jsps-bonn.de